

ウッドとともに

مع العود

ウッド奏者

荻野 仁子

「わあ！こんな綺麗な紙芝居、みたことない」って。絵の世界って、グッと人の気持ちを引き寄せますよね。観ているだけで幸せな気持ちになる絵ってありますし、絵の世界に入ってしまう夢をみたり。アニメや映画は、映像とともに音楽があって、観ることと聴くことで私たちを楽しませてくれます。私は今、幼いころ絵の中の音楽を想像していたように、ウッドという魅力的でオリエンタルな音色とともに、紙芝居の世界を作り、演奏をしています。



紙芝居「AIDA」を上演

アラブ世界との出会い

私は福島県の猪苗代町というところで生まれ育ちました。小学4年の冬、スキー合宿に参加したある雪嵐の日、旅館に置いてある漫画をみんなで回し読みしながら嵐が過ぎるのを待っていました。その中に「王家の紋章」という漫画がありました。エジプト考古学を学ぶ現代娘がある日ナイル川に落ちて、古代エジプトにタイムスリップし、遠く果てしない時を超え、愛と夢とロマンが繰り広げられる壮大なストーリーに、私の心はすぐに虜になりました。それからエジプトに関する写真や絵を眺めては、そこにいる自分を想像したり、音楽を漠然と想像したりと、いつの日か自分も絶対エジプトに行こうと決めていました。

その後は受験戦争に突入し、私は大学へ通う傍ら早稲田大学エクステンションセンターというところでエジプト考古学とヒエログリフを勉強しはじめました。ヒエログリフは漢字と同じように表意文字や表音文字もあり、例えば「月」という文字の横に「蔵」が付くことによって「臓器」の「臓」という漢字に変化するように、ヒエログリフにもこうした多様な文字が沢山あります。供物を捧げるようなレリーフには定型文もあるので、初心者にも比較的分かりやすいと思いました。もし私が古代エジプトに生きていたとしても書記官にはなれないかもしれませんが、神殿の壁画やオベリスク（神殿に建てられた記念碑のような高い石柱）の文字は読めるかな、などと想いを巡らせていました。そのうち、私はアラビア語も少しずつエジプト人の教授から習い始め、本格的にエジプトへ行く準備を始めました。そして海外留学の試験を受け、この試験に合格しなくても休学してエジプトへ行こうとしていることを話すと、熱意だけは買われ、資金面で応援する、帰国後は報告書をきちんと出さない、というような形で合格になりました。

カルチャーショック

カイロ空港には受け入れ先からの送迎車が待っていて、カイロ大学女子寮というところへ案内されました。通りにはいる門番に挨拶をして、鉄の扉を開けてもらい、薄暗い階段を上り、あてがわれた自分用の部屋へと入りました。しかし、電気が付かない、窓には固く外からの侵入を防ぐ鉄格子、パイプベッドの上には固い毛布が1枚、そして小さな机。数分ごとに誰かがドアをノックしてきて、挨拶するまで帰らない。そんな大歓迎の中、私はほとんど眠れず3日間ほど過ごし、その後少し快適な近くのホテルに移動しました。日本では、24時間営業のコンビニのある便利な学生時代を過ごしていた私にとって、食料の調達が一番困難でした。一人で外に出て、食べ物がありそうな店を途方もなく探し歩き、店らしき場所を見つけるが、値段がついてないものをどのように買ったらいいか分からない。勇気を出して店内に踏み込むが、何を買って食べたらいいか分からない、店の人の熱い視線に緊張する。見た目では食べられそうなものは果物。やっと手に入れたリンゴ、バナナ、もも、オレンジ、そして水だけの生活を1ヶ月ほど送りました。しかしそのうちにカルチャーショックにヘコんでいたら生きていけ

ない!と、時折襲ってくる腹痛にも耐え、言葉が分からない緊張感にも慣れ、羊やロバや鶏の飼育小屋が近いせいか、ハエのたかったフール（煮豆）の鍋から作ったサンドイッチも食べられるようになりました。

少しずつ、日本を知り、イスラムを知り

エジプトでは Institute of Educational Research and Studies in Cairo University というところに在籍していました。レバノンやカタル等他のアラブ諸国の教育関係者が多い研究施設でした。そこが休みの期間は ILI (International Language Institute) という語学学校へ通いました。生徒は主にスーダン、ソマリア、エチオピア、そしてエジプトの地方出身者などが多かったです。アジア人は私一人だったので、授業以外の時間は当然質問攻めでした。政治や宗教観、恋愛、結婚、家族関係の話題等について、長い時間討論をしました。日本を離れて初めて日本を知った時でした。私はごく普通の日本人として、大学入学と同時に地方の親元を離れて生活し、自由に恋愛もしてきました。しかし彼らは、大学は親元もしくは親族の家から通うのが当たり前であり、単身で留学をしようとするということは理解しがたいと思う反面、羨ましいと感じているようでした。保守的らしき男性の大学の先生からは、ここの女子学生に新しい考えを吹き込むなよ、と言われたこともありました。当時は冗談のように思っていたのですが、今思えば少し本気で言っていたのかもしれない。古代エジプトは大好きですし、現代のエジプトにも好きなところはありますが、長期で住むには難しい国だとも実感しました。

ウードとの出会いとその魅力

帰国後は、仕事をしつつもお金と時間が許せば海外へ行くという生活を送っていました。何度目かのエジプト行きのある時、知人からウードの写真を渡され、これを買ってきてと言われました。私がウードを知った時でした。しかし、リュック1つでエジプトへ行く私にとって、当時ウードなる楽器を手頃な値段でしかもある程度良いものを買って、手荷物で持って帰ってくることは少し大変なことでした。その後持ち帰ったそのウードを手渡して私の任務は完了しましたが、彼女は自宅に飾ったまま弾かずして時が経ち、そのうちに結局ウードは私のところへ戻ってきたのです。私は弦楽器を持ったことすらなかったので、ウードを構える向きやチューニング（構えた時一番上の弦が低音になること）などを調べ、独学でウードを勉強始めました。そして、次第にウードを使ってバンド活動を始めました。そんなある日ウードを弾く人が日本にいと知り、民族楽器とはこんなものなのだろうかという疑問と、つまらなさ（今考えると全く恐ろしいことですが）を感じ始めていた頃だったので、聴きに行ってみることにしました。しかしその方の演奏は、今まで聴いたことのない音楽と音色でした。わたしは衝撃



常味裕司師匠との楽しいレッスン風景

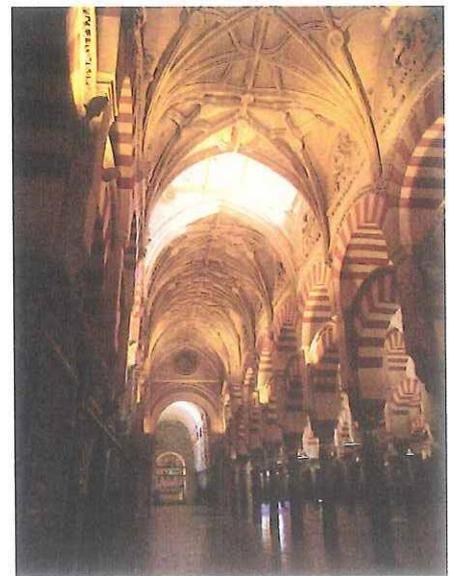
と感動を覚えその日に弟子入りし、現在に至っております。

ウードにはギターのようにフレット（音程をとるためのしるし線）がなく、西洋音楽にはない音程を弾きだすことができます。しかしながら、音程を的確にとり、マカーム（アラブ音階）に基づきタクシーム（即興演奏）を演奏するという世界は、永遠に追いつけても届かないような気がします。私は、果てしなく遠い時を感じさせてくれる、歴史あるこの楽器を手にしていただけで喜びを感じます。また同時に、謙虚に生きることを学び、一人の人間としてどう生きるか、ということも常に問われている気がし、身が引き締まる思いがします。

アラブ音楽とセファルディ音楽

アラブ音楽は、イスラム帝国時代（後ウマイヤ朝 756 ~ 1031 年）に文化人であるズリヤーブ (789 ~ 857 年) が、当時アラブ・ペルシャ・ギリシャ音楽が集まっていたバグダードからその音文化を首都であるコルドバにもたらした後、多くの音楽家たちによって理論的に整えられ、今日の姿になったと言われております。また、アラブ音楽は、イスラム

教徒ばかりでなくユダヤ教徒あるいはキリスト教徒にもその伝統が受け継がれております。そして拍子も 5、7、9、10 拍と多様で、時にリズムを取ることも難しく、アラベスク模様のように永遠につながってゆく錯覚に陥ってしまうことがあります。



かつてイスラム帝国の文化の中心であったコルドバのメスキータ（モスク）

そんなときは音楽を感じることはできません。3歳からピアノを習い、楽譜から離れることができなかった私にとっては、この音楽をただ感じるということがとても重要でした。アラブ音楽は、ミスなく完璧な演奏が最高のものだと思っていた私の固い音楽に対する概念を壊し、私に音楽の自由と面白さを教えてくれました。

またセファルディ音楽は、イスラム帝国時代からの音楽で、後にレコンキスタ（718～1492年）が次第に厳しくなった時に、スペインから各地に散ったユダヤ人たちが各地で歌い継いできている音楽です。同じく、ヌーバというムスリムたちがマグリブ（モロッコやチュニジアなど）で伝えている音楽もあります。私がセファルディ音楽を初めて耳にした時、リズムやメロディがアラブを感じさせるのに歌詞がアラビア語ではなく、スペイン語のような言葉だったことに驚きました。また、その言葉はラディノ語というユダヤ訛りのスペイン語で、主に女性によって歌われているということ、そしてイスラム帝国時代、キリスト教徒もユダヤ教徒も共存している時代には、お互いの文化交流の中で生まれた音楽であり、そこには民族や宗教や言語を超え演奏し合う自由があったということを知りました。民族や宗教や国境の問題で争うことの方が多い歴史の中で、セファルディ音楽はそういった枠を超えてたくましく、そして自由に渡り歩いている、私はその生命力の強さに惹かれています。

日本人として、女性として、ウードを弾くこと

2011年12月ウードの修行と見聞を広めるため、アブダビ、カイロ、そしてスペインまで足を伸ばしました。

アブダビでは、イラク出身のウード奏者 Nassir Shamma 氏が創設したウードハウスを訪問しました。目的はエジプト人女性のウード奏者 Sherine Tohamy 氏に会うためでした。エジプトの若い女性が、ウード奏者としてアブダビという地で活躍していることは、とても興味深かったのです。彼女は幼い頃からウードを弾いてきたわけではなく、普通に大学を卒業しマスコミに就職しましたが、ある時ウードの魅力に心を奪われ仕事を辞め、その後長い努力を積み重ね、現在ではアブダビの女性たちにウードを教えるという立場に着いています。ウードハウスという場所では、学生たちはいくつもある部屋や空きスペースで、ずっと音楽を練習していました。中には4歳前後の子供たちもいました。彼らは伝統的に音楽一家だそうで、ネイ（葦の笛）もカーヌーン（琴の一種）も、全てを完璧に演奏していて驚きました。Sherine Tohamy 氏は、アラブの女性にとっては今でも外（社会）に出ることは簡単ではないこと、また、情操教育として音楽を習い、やがてそれが素晴らしい才能となっても、結婚を機にやめざるを得なくなってしまうこと、アラブ世界でもウードを弾く女性はあまりいないため嫉妬も多いことなど、女性として抱えている問題を話してくれました。しかし、これからは女性も外に出る時代だと、彼女は子育てをしながら働く、時代の先に行く女性として

活躍しています。

私もウードと出会い人生が大きく変わりました。私と音楽そしてアラブ世界を上手につなげてくれるウードの存在はとても大きいです。日本人として、女性として、ウードを弾くことは、これからもずっと考えて行くテーマです。幼い頃に漠然と思い描いていた音楽を、いつの間にか



Sherine Tohamy 氏と一緒にウードハウスにて

今ではアラブの楽器ウードで演奏していて、時には紙芝居という絵の力を借りて、弾きながら歌うことをしているうちに、自分を含めて、頑なになってしまった心を解き放つ瞬間があったりします。時間の過ぎてゆくスピードが速く感じるこのデジタルの時代に、紙芝居のアナログの世界は、なんとなく私にもウードにもあっている気がします。冒頭の写真に使わせていただいたのは、初めての自ら手がけた作品「アイダ」です。当初は千夜一夜物語の中から有名な話だけを絵本で上演するつもりでしたが、自分の気持ちがひかれる作品を作り、そこに音を入れたいと思い、思い切って作ってみました。昨年のクリスマスイブに初演をし、「わあ！こんな綺麗な紙芝居、みたことない」と言われたのがとても嬉しかったです。そこにいる人全員が古代エジプトヘタイムスリップです。ちなみに私は絵が大の苦手です。Word ソフトを使って1枚1枚作成したのです。今年はアイダを作ったジュゼッペ・ヴェルディ（1813年10月10日 - 1901年1月27日）の生誕200年、そして亡くなった日に私はこの文書を書き終えることができました。それは全くの偶然ですが、なにか様々なものに不思議と導かれて、私はウードと共にこれからも進んでいくのだと思います。

末筆ですが、まだまだ若輩者の私にこのような文章を書く機会をくださり、大変感謝申し上げます。

萩野仁子：エジプト、チュニジア等への渡航を重ねるうちウードと出会い、2001年頃より自作音楽でバンドを始めライブ活動を行う。2003年よりチュニジアの国宝といわれるアリ・スリティ氏の意志を継ぐウード奏者常味裕司氏のもとで本格的にアラブ音楽・演奏法を学ぶ。松本泰子氏に歌唱師事。2011年アブダビでエジプト人女性奏者 Sherine Tohamy 氏、カイロでヘルワン大学音楽科 Khairy Amer 氏に師事。現在、アラブ及びスペインセファルディ音楽、また紙芝居で活動中。http://ogitano.com/